

創立者と日中民間交流の淵源

——中国研究会の設立と呉月娥先生との交流——

大 倉 鎮 信

はじめに

皆さんこんにちは。お忙しい中、お集まり頂き本当にありがとうございます。皆様の最も大切な時間、金曜日の夕方に大変恐縮です。私の拙いお話が皆様の今後の人生に少しでも何らかの参考になればとの思いからお引き受けした次第です。ともあれ私たち卒業生にとって、母校に戻る機会があるということが最高の喜びですので、このような貴重な機会を頂き心より感謝申し上げます。

さて本日は、創立者と武漢大学の一教師呉月娥先生との交流の持つ意味を皆様とともに考えてみたいと思います。自己紹介を交えながら話を進めたいと思います。今日参加されている皆様の中には、中国の地でお会いしたことのある方がかなりいらっしゃるようですが、日本でまたお会いできて大変うれしく思います。ありがとうございます。本日は何しろ皆様が生まれる20年前の話をするというのですから、皆さんには全く実感できない時代、まあ、歴史の授業と思って我慢して聞いてください。残念ながら単位はあげることはできませんが。

私は創大一期生として1971年に入学し、中国研究会の発起人であり初代部長を勤めさせて頂きました。翌年1972年に日中国交回復があるわけですが、その半年後、国交回復後初めての1973年春に派遣された日中友好協会の学生訪中団の一員として、創大生としては初めて中国を訪問致しました。その訪中で知り合った武漢大学の呉月娥先生との出会いが、その後、創立者の激闘によって、創立者と中国の民間人との初の交流となる、そのきっかけになることが出来ました。あまりに昔の事なので、ピンと来ないかもしれません。皆様のお父さん、お母さんが、ちょうど皆さんの年齢の時と思ってください。

卒業後は、日中貿易を主力とする現在の東工コーセン株式会社に入社致しました。現在は深刻な就職難ですが、私たちの時代には、大学が初めて送り出す卒業生ということで、世間にはまだ誰も先輩がいないわけです。そういう意味で就職は挑戦の連続でした。幸いに、現在の会社の当時の社長面接で、「わが社には、単に頭の良い東大生のようなものは必要ない。君のような熱意の有る人材が欲しい」と仰っていただき、入社できました。どうか現在就活で頑張っている皆さ

大倉鎮信（創価大学1期生、中国研究会初代部長）

* 本稿は、創価教育研究所講演会（2012年6月8日）での報告に加筆・訂正したものである。

んも、就職面接には熱意を持って挑戦してください。

さて、入った会社ですが、1953年に日中貿易を日本で最も早く開始した会社の一つとして大変有名でした。今から60年も前ですね。私もすでに、この会社に40年近く勤めております。その間、駐在生活10年程度、出張ベースでの滞在日数の合計が10年以上、トータルで皆さんの年齢以上の歳月になる20数年間を中国の地で生活していることになります。その間、中国で訪れたところは、全省22、台湾を含めると23。チベット、新疆などの自治区5。北京上海天津重慶の直轄市4、香港澳門などの特別行政区2。その全てに訪問することができました。中国人でも数少ない、日本人でもほとんどいないと思います。

ともあれ、そのような中で、入社5年後の1980年の創立者第5次訪中以降第10次訪中まで、そして1996年から毎年連続した香港訪問の際にもほとんど全てその現場に駆けつけることが出来、ありがたいことに、お手伝いをさせて頂くことができました。創立者の中国との友好を金の橋として磐石なものにしていく大誠実の行動を目の当たりにしてまいりました。私は大学職員でも本部職員でもありません。一民間中小企業に勤めながら、こういう人生を送れたことは私の生涯の誇りです。本当に幸せ者と思っております。現在は、月に一度くらい中国出張の機会がありますが、先々でわが創大のDD（デュアル・ディグリー）はじめ留学生、卒業生の皆様と一緒に食事をともにしながら日中友好の話や創立者の激励などについて懇談することが最大の楽しみとなっております。

さて、本日は、創立者が『新・人間革命』で紹介してくださっている中国研究会の設立に関するお話（15巻）と、呉月娥先生との出会いに発する民間交流の淵源について（20巻、21巻）主にお話させて頂きたいと思います。一時間ほど、話が अच्छ こっち飛ぶかもしれませんが、ご容赦願います。

創立者と中国の関係は、周総理等との歴史的な会見や10度にわたる訪中、中国各界、政治指導者、青年指導者、文学者、芸術家、学者等の交流、大学交流、各訪日団の受け入れ等により、本当に広範な交流がなされております。いずれも創立者が民間人であることから民間交流、民間外交と称されております。その中で、特筆すべき交流がこの呉月娥先生との交流だと思えます。なぜ特筆すべきかといいますと、この交流は周総理や鄧小平氏との会見時期と同時期に開始されたこと、および当時の環境にあって、まったく政治的背景を持たない庶民との交流であったことです。呉先生の場合は、大学の責任者や教授でもない、一人の日本語教師という立場でした。

時を同じくして片や中国のトップ政治指導者と、片や一民間人と、その双方との深い深い交流が始まったわけです。そんな一人の教師と、創立者は最初の出会以降、何度も何度もお会いし、家族のような親しみのある交流を続けられました。この時期は、トインビー、周恩来、キッシンジャーなどと、いわゆる世界史の中の大人物との会談をこなしながら、実に多忙を極めた時代に、そうした世界史的な民間外交と同時に、無名の一人の教師と何時間も、何時間も時間を共にし交流されたわけです。なぜなのか。本当に信じられないような出来事でした。おそらく、世界の中で、ここまで時間をとって親しい家族のような交流をされた民間人は呉先生をおいて他にはいな

いのではないかと思います。

創立者は、中国の指導者との交流を大事に大胆に展開されながら、一方ではまったくの庶民ともいえる一教師との交流をここまで、時間をかけ、大事にされました。その現場に居合わせた私としては、どうしても語り継いでおきたい創立者の交流の歴史であります。今、この創立者の示された行動が、私たち中国と関わる人の底流にあります。それぞれが、出会った中国の人と創立者と同じように心と心の交流を行っております。この心と心の交流こそが、何物にも代えがたい私たちの宝となっているのです。

本日は、周総理会見や鄧穎超夫人との麗しき交流をはじめとする中国の著名人との交流はあらゆるところで紹介されておりますので、それとは別の角度からの交流の歴史を紹介し、皆様の今後の中国との関わりの参考にいただければと思います。民間交流といった場合、中国は政治の国であり、一般に、創立者を含む日本の民間の人物・団体と中国の政治家あるいは政治的背景を持った人や機関との交流が主力であったわけですが、この交流はまさしく民間人と民間人、民間交流ともいうべき画期的な、重要な歴史の底流をなす淵源の交流であったと申し上げたい。さわやかで温かい心と心の交流であり、創立者の深く誰人をも包み込む振る舞いであったのであります。

中国研究会の設立

私が高校生の時は学生運動が激しい時期で、社会革命による変革が高校生、大学生の間で叫ばれている時代でした。私の学んだ埼玉の川越高校でも、校長室占拠などの異常な事態が続きました。そうした渦の中で「根本的には人が変わらなければ社会は変わらない」とした人間革命理論に衝撃を受けました。創立者の『人間革命』の書物に触れ、多くは分かりませんでしたが、求めているものに遭遇した大いなる喜びを感じました。同時に、「宇宙は無限か有限か?」「生命の起源はいつか?」などの論議をしょっちゅうしている最中でしたので、「無始無終」「始めもなくて終わりもない」という仏法理論にも、かつてない衝撃的な思いを味わいました。受験期間でもあり、あまり創立者の思想を深く学んだというわけではありませんでした。ただ、『人間革命』などで、中国を重視し、東洋、世界の平和を追及されていることには関心を持っておりました。

私自身、中学時代に「漢文」の教科書に描かれた水墨画に憧れ、高校時代は吉川英治の『三国志』をその面白さに3晩徹夜で読んで、そのまま体調を崩し入院して修学旅行にいけなかったという経緯があり、中国に強い興味を持ちながら大学受験をいたしました。1968年の創立者の「日中提言」は大学に入って初めて読むわけですが、強烈な感動と衝撃を受け、大学初期は自分の人生は中国に賭けて見ようとの決意が固まっていった時期でした。

ここで、当時の時代状況について若干触れさせて頂くと、日本と中国の間には国交がありません。国交がないとはどんな状態か？ 皆さんには想像しにくいかもしれませんが、例えば、今の北朝鮮との関係を考えてみてください。国と国の関係ができていない。お互いの国民同士が疑心暗鬼の気持ちで、信頼できない。しかも共産主義の国。右翼が命を張って反対する。そんな相手

の立場に立って発言すれば、身の危険さえある。民衆同士が自由に往来することもできない。そんな時代背景です。その中で、創立者は敢然と中国との友好を訴え、日本を根底からリードし、周総理の感動と関心と呼ぶことになり、日中関係は大きく転換していくわけです。

さて、開学まもなく、(中国との関係改善こそが、世界の平和に最も大事になる) そんな思いで、中国関係のクラブを作ろうと決意を固め、滝山寮に「呼びかけのポスター」を掲示しました。その「呼びかけ」に約20名の人が呼応して来ました。そこで、創立者の御構想を実現しゆく存在が我ら創大一期生であるならば、創立者が強く表明されている中国に焦点を当てるべきことを力説しました。

参加者からは、「まず歴史を学ぶべきだ」 いや 「語学を優先すべきだ」「文化を学ぶべきだ」等々、様々な主張がありました。白熱した議論が続いた結果、「それぞれ、大事な視点が多く出たわけだけでも、限定しないで、各自が興味を持つ分野を独自に研究することにしましょう。会としては、従って中国文化研究会とか中国語研究会とか限定せず、トータルに中国を地道に捉えていこう。従って、会の名称は『中国研究会』として、様々な分野を包含していくクラブにしたい。」という私の発案で、名称は「中国研究会」ということになったわけです。

活動としては創大祭がメインであったわけですが、第一回より創立者、奥様の参観を受けました。創立者からは「中国には毛沢東語録があるけど、うちには池田語録があるからね」と言われたことや、奥様から中国の毛沢東の後継者について尋ねられたのですが、翌年の創大祭で奥様から「昨年、こういうことを質問いたしました。その後何か変化はありますか?」と再び尋ねられた時はさすがに驚きました。あの多忙な中で、昨年の質問の内容まで覚えていらっしゃる、その記憶力の凄さというか、真剣さというか、創立者もすごい、奥様もすごいんだなあと驚いたことを鮮明におぼえております。懐かしい思い出です。

また、トータルに中国を捉えるという観点から、中国の歴史、地理などの展示を行っていったわけですが、それこそ神話の時代から取り上げ「中国に流れる豊かな民情」と題し悠久な中国の歴史を学んだり致しました。当時の各大学の中国研究のクラブではほとんど、毛沢東関連の現代革命中国の展示が主流だったこともあり、この創大中研の取り組みに横浜市大の「波多野太郎」氏、当時「西の香坂(順一)」「東の波多野」といわれた中国文学研究の日本でも第一人者であるその波多野教授がわが展示を見て感動され、お手紙を頂きました。(今回過去の資料を探しているときに、幸いにもこのお手紙が見つかりました)「大学祭のとき、大兄の率いる研究会が全く正しいこと、その研究方向が全く私と同一であることに感激いたしました。一般大学の研究会と異なりダイナミックに、そして総合的に客観的に中国を捉えようとする努力は、洵に現在稀なりと愚考します。その感激は、竹内文学部長先生にもおはなし申し上げたしだいでした」と、わざわざ感激のお手紙を送って下さったのです。

その後、波多野教授は、わが大学の非常勤講師として来て下さいました。これは、わが中研が将来にわたって、中国数千年の歴史を深く学び且つ永続的に中国とつきあっていこうとする姿勢を示すことが出来た画期的な出来事でした。

また、語学においては、私たちの時代には、第2外国語でも中国語がありませんでした。英語、フランス語、ドイツ語しかありません。当時、中国語の翻訳等でNHKに勤めていた山口和子先生にぜひにお願いし、英断をして頂き、NHKをやめ、創大に来て頂くことになり、一期生の卒業後によりやく正式に第2外国語となりました。山口先生はその後長く中研のお母さん（顧問）として創大の日中友好に多大な貢献をなされてゆくわけです。

ちなみに、中研の初代顧問は、麻生達男先生（モンゴル語の日本の第一人者）、2代目は土井健司先生（創立者と『人間と文学を語る』を編む）、3代目が山口和子先生、4代目が田代康則理事長ということになります。

さて、本年度で39回目を迎える中国語弁論大会ですが、これは、1974年の大学祭が第一回目です。当時、聖教新聞社の大原照久さん（残念ながら60歳を前にして亡くなりましたが）や西園寺一晃さん（明治の元老西園寺公望のひ孫にあたる方で創立者の第一次訪中から一貫して創立者の勇気ある行動を宣揚して下さっております）の間で「中国語弁論大会」のことが話題に上っております。当時は「朝日新聞社」の弁論大会が唯一日本で大きく行われておりました。大原さん（アジア平和文化研究会—創立者のもとに結成されたアジアの平和と文化交流をめざす会—の代表）より、「弁論大会をやろうよ」とのお話が私にあり、それならということで、創大祭のときに行うことになり、従って第一回はアジア平和文化研究会 創大中国研究会の共催ということで開催いたしました。

突貫で全国から応募者を募り、審査員長に山口和子先生、審査員には、西園寺氏や呉月娥先生をお招きし、私が司会で行いました。全国各地から中国語に堪能な弁士が集い競い合いました。教室が一杯になり、立ち見の人まで出る盛況でした。このとき洲崎さんが特別賞、あまりにうまいので、1-3位のレベルと違うと言うことでした。皆様もよくご存じの創立者の通訳ですが、香港人で日本に来てから日本語と北京語を習得した天才的努力家です。またこの大原照久さんは、日中友好の大功労者として創立者が『わが忘れ得ぬ同志』に「アジアの平和を夢見た言論王」と書き残してくださっております。

創大生としてはじめて中国に行ったのは私ですが、実は現在の創大を見回して、最初に中国に行ったのは誰かと申しますと、石川恵子短大学長です。大原さんとともに石川先生は早くも1971年に中国を訪問し、実際に周総理とお会いし、青年への期待の激励を受けています。思い出しますと、大原さん、石川短大学長、浅井治さん（現在広東外語外貿大学で日本語を教えますが、その授業が今中国人学生から爆発的な人気を博しております）らが、すでに、1968年の「日中提言」を受け、積極的に中国にわたっております。

そうした中国への思いを熱くした先駆の先輩がおりました。弁論大会も、今年で39回目と聞くと感無量です。また、今年4月に行われた観桜会に周総理の縁戚の方が出席されたのですが、「当日参観した自分たちのためにわざわざ開いてくださったものと思っていたが、この観桜会も今年で33回と聞き、その深き創立者と周総理・鄧穎超夫妻との交流に驚き感激した」と挨拶しておりました。いずれも30年を超えています。歴史の重みを感じます。

中国研究会の初期の活動は多岐にわたっておりますが、創立者と研究会全体との本当に深い交流は、私の卒業後、第一次国費留学生を迎えてから、4-7期生ぐらいですが、「日中友誼農場」や「月見の宴」など魂に触れる素晴らしい歴史を刻んでおります。この辺の状況は、樋口先生などが詳しいので、別の機会に譲りたいと思います。

呉先生との交流

この辺で今日のメインテーマであります呉月娥先生との交流についてお話したいと思います。

創大2年の時、1973年3月訪中時、当時は香港経由でまず広州に入り、その後毛沢東の故郷である湖南省「韶山」へ行きました。その後が武漢訪問でした。武漢大学では一日10時間におよぶ学生交流会がありました。36人の訪中団でしたが、いくつかのテーブルに分かれて歓迎宴があったわけですが、その際、偶然に隣に座ったのが呉月娥先生だったのです。隣にいやに日本語の上手な先生が座ったことが幸運でした。全く普通の日本語で会話できるわけです。何日も緊張した団の全体通訳による旅が続いていたせいもあるかもしれませんが。何しろ通訳無しで個別に会話できるわけです。訪中団は私を含めほぼ全員が中国語が片言しか出来ない。そんな中で、本当に気さくに日本人と同じ日本語を話す人と出会ったわけです。

中国にはすごい人がいるんだなと思いました。と同時に、是幸いと我が創大の建学の理念と理想をお話することが出来ました。その時、呉先生は、日本の他の大学の名前は少しは分かっていたのだと思いますが、我が創大の名前を見るのは全くはじめてゆえ、「創価」とはどういう意味かと聞いてきました。「出来たばかりの新しい大学であり、価値を創造する大学であり、人間教育を根本とします。そして世界の平和と文化の興隆を目指しています」等々、建学の理念をよどみなく語る私に、「日本にゆくチャンスがあれば是非貴方の大学に行ってみたいわ」と仰ってくださいました。呉先生は後に述懐し、私の話に社会主義建設を目指し、人材を育成しゆく中国の教育と共通する思想があると感じられ、非常に興味を持ったとのことでした。

当時は、日本人も自由に中国にいけませんでしたし、中国の人が日本に来るなどは、さらにさらに難しい時代でした。それが、翌年実現するとは、まさに青天の霹靂。夢のようなことでした。その後の経緯と創立者との本当に心あたまる交流は、創大の歴史、日本の歴史に残る真に民間人と民間人の交流の淵源であります。

『新・人間革命』にかなり詳しく記されておりますが、そんな出会いから丁度一年、ある日ふと、本当にふと武漢大学の呉先生のことを思い出したのです。そして無性に懐かしくなり、筆不精の私が、一度しか会ったことのない人に手紙を書いたのです。今思うと自分でも本当に不思議な行動でした。何かが私を突き動かしたのです。

ところが、その時呉先生はすでに日本に来ていたのです。知る由もなかったことですが、呉先生は、戦前日本で育てられ、結婚後中国にわたった華僑でした。日本の育ての親（実の親と思っていたが、後で叔父さんと判明）の看病のため、中国当局に早くから（1年前に武漢大学でお会いしたときにはすでに申請済みだったわけですが、そんなことを外国人に話すことも出来ない時

代だし、まして許可が下りる可能性が極めて低かったとあとでお聞きしました）申請をだしていました。

幸運にも奇跡的に許可が下りて、ようやく訪日がかかった丁度そのとき、そのことを知らない私が日本からお手紙を出したわけです。呉先生は、手紙のことを知るその前に、日本到着後すぐに創大の電話番号を調べ、私と連絡しようとされたのです。呉先生は1年前の創大への興味をそのまま持ち続けてくれており、自ら連絡をされたとのこと。残念ながら丁度春休みでうまくいかず、そのままになっていた所、私の手紙が武漢のご主人から日本に転送されたことにより、呉先生が、今度は直接私との連絡を取ろうとするわけです。もし、このタイミングでの私の手紙がなかったら、看病に追われて多忙であったことを考えると、私との再会もなかったであろうと思います。本当に幾重にも偶然が重なる出会いでした。

私の手紙にはもちろん電話番号が書いてあるはずありません。呉先生は、電話帳で私の電話を調べて、ようやく私の家に電話してきたのです。「もしもし、中国の武漢でお会いした呉ですが」「いや私は中国に行ったこともありません」しばらくのやり取りの後「それなら弟です」（電話に出たのは、私の兄だったのです）と言ってようやく会話が成り立ち、後日連絡が取れたのです。信じられない思いでしたが、喜びと何で日本にいるんだろうとの不思議な感覚で再会することになったわけです。

実際一年ぶりにお会いし、本当に嬉しい気持ちでした。当時中国人と接触するときは、何か警戒心をもって臨まなければならないような時代状況でした。それが、なんと気さくな明るいおばさんだろうと大感動でした。

さて、どのタイミングで大学に案内しようかと真剣に思案していましたが、学生がキャンパスでにぎわっている日がいいたろうと思い、あえて1974年8月22日の学生大会がある日を選んで、御案内することにしました。ゆっくり大学のあちらこちらを紹介しながら歩いているところに、学生大会の関係者が私を探し出し、夜、学生大会があるので、そこに参加するよう創立者から話がありましたと、伝えてきたのです。びっくり仰天です。もともと私は、その学生大会には出るようになっていませんでした。昼間見学して、少し学生でにぎわっているところを見てもらい、そのまま帰ることにしていたのです。

夕方の学生大会に出席すると席が用意されていて、なんと創立者の同じ並びのすぐ横に呉先生、私とそのすぐ後ろの席でした。大変なことになった。と瞬間思いました。中国人との付き合いは、あまり大げさにできないと思っていた時代でした。なぜなら、外国人と、しかも思想団体に係わる人間と交流したことが中国当局に知れたら、それこそ批判の対象にされると思われていた時代だったわけですので。

創立者は、そんなことにはお構いなく、自ら呉先生に話しかけ、ごく親しそうに会話されたのです。呉先生もその時は、池田先生がどういう人物か、理解できる環境にはおりませんでした。学長さんぐらいに捉えていたそうです。しかし、口頭一番「お父さまの病気はいかがですか？」と親しい家族のような語り掛けに、本当に驚いたそうです。

終了後、創立者は、呉先生とともに「万歳三唱」され、そのあとグランド一周です。堂々と行進です。私だけが興奮と喜びと更に「この後一体どういうことになるのだろう」との不安をかかえながら、後ろについて行進しました。さらに、この行進の写真が次の日の聖教新聞に大きく報道されました。創立者がやさしく見守られ、呉先生が堂々と行進しています。創立者の後ろに私が小さく写っているのですが、私のこの時の心境は、身近に創立者とお会いできた喜びと、いよいよ抜き差しならない状況に追い込まれたと大変複雑でした。

その後11月に、創立者から「万葉の家」に招待されました。「万葉の家」に行く前に大学の構内で、創立者、奥様、呉先生、山口先生と私の5人で語らいの場がありました。これを報道した聖教新聞の記事の写真には、親しく話す創立者と、潑刺とした呉先生の姿がみえます。このときは、本当に家族のような会話がありました。呉先生の家族のことや、私との出会いなどを話題に、本当に和やかな会談でした。今だから言えますが、呉先生の娘を私が嫁にしたらというような話題に広がり、更に「それはいい。私は立場上、仲人をやったことがないけれど、是だけは私が仲人をしましょう」といった話にまで発展しました。先生と奥様、呉先生、山口先生らは、心から嬉しそうな喜びの会話をしていたわけですが、私にとっては、顔には笑みを浮かべながらも是は大変なことになった、一体この先私はどうなるのだろう、と大変複雑な心境でした。

創立者とお会いする際は、いつも緊張の極致のような気持ちでお会いしてきたわけですが、こんなに気さくで家庭的で飾らない、人間そのものといった温かい創立者をはじめて知ることが出来ました。

そこから万葉の家に移って会食会があったわけですが、そこでは、「北京大学に行ってきたけど、武漢大学には呉先生がいらっしゃると思うと特に親しみがわくね」と仰ってください、その場で「3千冊の図書を贈呈しよう」と御提案されました。そして「武漢にも行きたいね、呉先生の家にも伺いたいね、お子様にも会いたいね」と本当に家族同士の会話のような親しい麗しい会食会になりました。

私に向かって、「友好友好といっても、呉先生は今頃家族団らんでご飯を食べているかな？とか、中国にいる相手の日常生活を思ったりする中に、本当の友好があるよ」と教えてくださいました。また「大倉君、中国に橋を架けような」と仰られました。「はい」と答えましたが、その当時は、まだ今ほど「金の橋」という言葉が定着していたわけではありません。私はその時、創立者は本当に日本と中国の間に本物の橋を架けるお気持ちだ、と理解し、日本のどこから中国のどこが距離的にいいのかとか、水深はどれくらいだろうとか、一時真剣に検討してみたことが懐かしく思い出されます。その後「金の橋」（朽ちることのない永遠の）ということがわかってほっとしたわけですが。（ただ、まだ頭の片隅で希望を捨てたわけではありませんので、工学部の学生さんがおりましたら是非一度検討してみてください）こうした和やかな面談は約5時間に及びました。

話が少し飛びますが、貞子桜と命名された桜の木が、周桜、留学生桜の並びの少し後ろにあります。実は、これはこの会食のとき、私から「実は大分に懸命に創大を目指していた純真な受験

生が、急に登校途中、列車事故にあい、亡くなってしまいました。その娘の気持ちにこたえるため、何とか創大から弔電を打ってもらえないかと連絡がありました」と申し上げました。創立者はすぐさま、「大学と私の名前で弔電を打ちなさい」と指示を出され、更に「名前は?」「若宮貞子さんです」「そうか、大学に桜を植えてあげよう。貞子桜としよう」と矢継ぎ早の対応をされました。「何とか大学からの弔電でも」とお願いしたことが、あっという間にここまでの展開となりました。

創立者は一受験生にここまで気を配ってくださる。しかも大学構内に桜の植樹まで。深い慈愛と電光石火の大胆な決断と指示を呉先生とともに目の当たりにしたわけです。一受験生の死に際し、創大からの弔電をと、その子の思いに報いようとする、大分の竹中万寿夫さんという方ですが、その心にも感動ですが、創立者の琴線に響いての展開となったわけです。竹中さんによると、さらに細やかな温かい様々なご指示があったとのことでした。

この歴史はあまり語られていないように思いますが、この呉先生との会食のうちの一件でありますので、この機会をかりて、お話させていただきました。中研の方は周桜を見る機会が多いと思いますので、その際ぜひご覧になってください。創立者はよく、「私の創った大学に来てくれてありがとう」と仰られます。その上、入学した学生だけでなく、この「貞子桜」に象徴される受験生にまで、ここまで気を配られる。この創立者の熱き思いを今日参加された皆様とともに共有し、わが創大を大きく発展させてゆきましょう。

呉先生との交流は更にその一か月後、周恩来会見の1974年12月5日の訪中より帰国された直後の12月13日に、またご招待いただきました。この時は、前半は西園寺公一、一晃さん親子を招待された会食でしたが、そこに呉先生と私も呼ばれ、周総理会見を述懐されながら種々お話ししてくださいました。

食事が終わったら解散と思っていた呉先生や私は、会食後、「今日はゆっくりしてってください」と、なんとまだ後半があったのです。びっくりするやら嬉しいやらで、卓球をしたり、ピアノを弾いていただいたり、家族的な交流が延々と夜10時まで、このときも約5時間続きました。私たちは創立者の多忙を知っております。なぜここまで呉先生を大切にされ深く深くお付き合いされるのか当時はただただ驚きと嬉しさでよく分かりませんでした。

今思うと、創立者と中国の無名の庶民（一日本語教師という立場でした）との交流の淵源がここにあります。いま多くの創大生がこの淵源の交流に学び、中国の人たちと心と心の交流を行っております。最近北京に留学していたDDの牛込伸幸君という学生がまとめてくれた文集『桜花の縁』にも、その例が多く紹介されております。

国と国の交流といえども、民衆と民衆の心の交流が最も大事だといわれる創立者の具体的行動であり、後継の私たちに「このように温かい心の通う家族のように付き合うのだ」と身をもって教えてくれているのだと思います。

あのグランド一周の時、創立者の胸中は「わが創大生が、必死になって開いた一本の道だ。この道も、きっと見事な大道にしてみせる。君の努力を決して無駄にはしないからね。弟子の奮闘

に最大の誠意をもって応える—それが師の心であった」 このように思われていたなどとは夢にも思わず、『新・人間革命』20巻を読んでからはじめて先生の深い深いお心を知った次第です。また中日友好協会の廖承志会長には、「一人の創価大学生が、私と同じ心で、日中友好の道を開こうと、懸命に奮闘し、交流の道を開いてくれました。私はその努力に報いたいんです」とまで語ってくださいました。なんと慈悲深い、大海をも包み込むような真心でしょうか。

さて、呉先生は新聞で有名になり、またその明るい外交的な人柄で北は北海道から、南は九州まで引っ張りだこになり、帰国までの数ヶ月本当にたくさんの友人が出来、「民・民交流」の足跡を残しました。

呉先生は、創大生、学会員に本当に中国の庶民との交流を身近に感じさせてくれました。まだ庶民の交流などまったくなかった時代ですから、いかにすごい交流の拡大だったか、日中友好の歴史の底流を彩る、かけがえのない美しき交流です。

呉先生が帰国される間際、創立者の発案で送別会を開いて頂きました。中国研究会が主体に行ったわけですが、一切を創立者が進行してくださいました。創大で初めての卒業式が行われ、多くの人が集われた最もご多忙の時間です。ここでも時間を割かれての2時間です。

呉先生は日本滞在中 創立者に2編の詩を贈っております。
一つは、「池田先生の目と心」です。

子供たちを見つめる時の先生の慈愛に満ちた目と心
じっくり物事を考えている時の先生の真剣な目と心
大事を定めるときの先生のあのすどい目と心
詩的情緒に溺れていられる時の先生のロマンティックな目と心
ユーモアに話を運ぶ時の先生のいたづらっぽい目と心
大衆の前で指導していられる時の先生の透き通った目と心
これらの目が先生の心を語っているように先生の目は多種多様の
関心で光輝いている
私はこのような先生の目が実に好きだ
(1975年1月22日)

もう一つは「大衆の先生 池田先生」ですが、これは『新・人間革命』21巻に紹介されています。

子供たちを愛し
青年世代に関心を持つ先生
女性を尊重し陰になって人に奉仕している人たちを
大切に大切にしていられる先生
年離れた人を労わり なぐさめ すべての人を心から
愛していられる先生
一人ひとりの人をととても大切にしていられる先生

私はこのような先生を心から尊敬している

いずれも創立者との交流により、その印象を詩にしたものですが、心と心の交流から生まれた美しいハーモニーがこの行間から汲み取っていただけたと思います。これに対し、創立者は送別会のおり、呉先生に返歌として次のような詩を贈られております。

中国服を着ても その英知と革命と進歩が備わった姿
日本服を着ても なぜか美麗の気品をたたえるその姿
これぞ日中友好の世々代々にわたる
大いなるロマンの架け橋の姿か
私は祈る 中日の金の橋の上を
あなたに続いて 陸続と往来する人びとの多きことを

「まさに、真心と真心が交わり、詩歌の花が開いた。馥郁と漂う友情の香気が、集った青年たちを包んだ。誠実な行動こそが、友情を育むのだ」と『新・人間革命』で紹介して下さっています。

1975年3月呉先生は帰国されるわけですが、その一か月後1975年4月末には創立者が武漢を訪問されました（第3次訪中）。北京から17時間の列車の旅です。こんなに長い時間列車に乗れたのは、はじめてのことと思いますが、超多忙な創立者が、一教師に会いにゆく誠実あふるる感動的な出来事です。本来は飛行機で行かれる予定が、直前にカンボジアのシアヌーク殿下との会見が入り、列車となったのです。どうしても武漢に行くとの創立者の強い希望に、中国側も特別に列車に車輛を一輛継ぎ足して対応してくれたのです。

武漢では呉先生も懸命に歓迎の準備をしておりました。日本滞在中に創立者が「月の砂漠」が好きだと聞いていた先生は、その歌の合唱をもって心から創立者一行を迎えました。まさに「こころ」と「こころ」の涙なくしては語ることの出来ない美しき交流です。娘さん息子さんも大学に呼び、家族ぐるみでお会いできたわけです。その後2人の娘さんは創大への留学を果たしております。

こうした創立者の徹底して一人の人を大切にされながら、大きな歴史の流れに拡大していく行動は、あまりに感動的でした。当時の時代環境から言って、外国人と勝手に付き合うことが批判される時代に、このような大胆な行動が出来たのは創立者をおいて他には無いでしょう。それも、中国の指導者や大学の指導者に経緯を説明し、家族を含めて守りに守りながらの大誠実の行動でした。

創立者は、武漢大学訪問のおり、「武漢大学を訪れたのは、今回が初めてですが、二度訪問した北京大学とともに最も親しみが有り、深い友情の気持ちを抱いております。というのは、私が創設した創価大学の学生が、学生訪中団の一員として、武漢大学を訪問し、熱烈な歓迎を受けたことを機縁に、友好交流がすでに行われてきたからです。その時歓迎して下さったかたがたも

この席にいらっしゃることと思います。日本語科の呉月娥先生もその一人だと伺っております。その後、呉先生はご尊父の看病のため日本を訪問され、創価大学の学生とも再会し、中日友好のために尽力されてきました。多くの人々が呉先生を通して中国人民へ親しい気持ちを持ちました。私も創価大学を参観された呉先生にお会いして以来、世々代々の友好を築くために、未来の春秋に富む日本と中国の若い世代の友情の一層の発展を願って、いくたびか懇談する機会がありました。(中略) 私は今回の訪問によって武漢大学と創価大学の間の友好が一層深まっていくことを強く念願しております。呉先生が創価大学を参観された際、学生たちは心から歓迎し、武漢大学で学ぶ学生たちへの友情の気持ちをこめて、コスモスの造花や折鶴などを贈ったときいております。私はこのような一人ひとりの心と心の間に固く結ばれる友情と信頼のきずなを更に太く大きいものに発展させていくことこそ、永続的な日中間の平和友好のかなめであると確信しております」と挨拶されております。

呉先生との交流につきましては、創立者自ら、いろいろなところで紹介されております。『敦煌』や『蒼き狼』、最近映画にもなった『わが母の記』の作者、井上靖との往復書簡『四季の雁書』でも次のように紹介して下さっています。

「呉先生は、潑刺として、明るい、そして気さくな女性ですが、呉月娥女史と一人の日本人学生とのふれあいから始まった、このような中国と日本の友情の交流は、現代において、私には非常に貴重なもののように思えてなりません。なぜなら、一人ひとりの人間同士の自然な接触が積み重なり、それがあたかも山頂を支える広い裾野ようになって、はじめて国と国との真実の友好の山頂が確立されるものであると、私は信じているからです。いわば、一人と一人との交流の背後には、それぞれ異なる国の民衆の大海があり、その細い無数の交流が互いの海水を注ぎあって、はじめて友好の海となる。その集流の一滴一滴を、私は尊びたいのです。それにつけても思い出すのは、かつて中国の一留学生であった鲁迅と、その師である藤野先生の場合です。——孤独な一人の留学生と無名の一教師との間に交わされた、さりげない、温かくまた誠実な人間のふれあいは、私の願う交流の原型です」

これに井上靖も「武漢大学の日本語教師をされている呉月娥女史と一人の訪中日本人学生のお話、それに関連して鲁迅と藤野先生との人間的触れ合いに及ばれたくんだり、繰り返し、感深く読ませていただきました。私もまた国と国との関係は、政治の形や国柄とは別に、人間一人と一人の友情の交流から出発しなければならないと固く信じています」と応じられております。まさにここに創立者の思想の真骨頂を見る思いがします。

呉先生と創立者ご夫妻との交流は今も温かく続いております。2年前、『新・人間革命』を手にされた呉先生は、創立者に大要次のようなお手紙を差し上げております。

「『新・人間革命』に、私ども家族のことや、交流の歴史を詳細に記して頂き感動しております。長女は——、次女は——、三女は——、長男は——（と家族の現況を御紹介し）みな先生と奥様の慈愛に見守られながら元気に活躍しております。アメリカの長男も『新・人間革命』を読み『世界の歴史に残るすごいことだ』と感激しております。また主人の名前まで記していただき本当に感謝します。武漢は今、桜が満開です。多くの市民が花見を楽しんでおります。桜花爛漫の創価大学を本当に懐かしく思い出し

ます。桜は創価大学が世界一だと思います。私もまだまだ元気ですので、日中友好のために頑張ります」

本日は、この創立者の民間交流の淵源、そしてその根底の思想をご紹介できればと思い、お話を引き受けた次第ですが、皆様のご理解の一助になれば幸いです。

日中提言から池田思想へ

語れば尽きない歴史ですが、ここでわが創大及び創大生への期待を少し語らせていただき、話を締めくくりたいと思います。

1968年創立者が日大講堂で1万数千人の学生を前に講演されたいわゆる「日中提言」であります。「中国の国連での正統な地位を用意すること。日中の国交回復の必要性。日中の文化、貿易交流の拡大」などを骨子に内外に衝撃を与えました。また、中国の革命を民族主義的な要素で捉えることや、若き青年同士の交流など緻密な分析と未来を展望した画期的な歴史的な提言です。

当時の時代環境は冒頭に申し上げました、国交のないきわめて厳しい状況です。少し余談になりますが、今皆さんは普通に留学ができますが、当時はできません。わが創大で中国への最初の留学を目指したのは、なんと現田代理事長です。もう一人同じ一期生の石立剛さんと一緒に大学4年の時、直接大使館へ直談判に行ったと聞いております。両国に留学生受け入れの協定がないということで、結局受け入れられず、大学に残り、逆に第一次国費留学生を迎え、滝山寮の同室で面倒をみられるわけです。その国費留学生は、中国政府の要職を務め、自らは現在創大の理事長ですから、また中国研究会の顧問もされていらっしゃることも、わが創大は、とことん日中友好の牙城であることがわかると思います。

創立者は敢然と中国との友好を訴えられ、世界に衝撃を与えました。当時の時代状況の中、この提言がいかに勇気あるものであったかは多くの人が証言しております。

有名な文学者竹内好は「光はあったのだ」と叫び、政治家の松村謙三は「百万の味方を得た」とまで語りました。その後の日中関係の基軸になる提言でありました。3年後の1971年創大開学の年には中国の国連復帰がなり、4年後の1972年には遂に「日中の国交回復」がなされました。1974年に周総理会見があり、その前には、ソ連の初訪問でコスイギン首相に会い、中国を攻めないと言を引き出し、それを中国首脳に伝えるという誠意ある大胆な離れ業の民間外交が行われました。1978年には、創立者が『人間革命』第5巻で提唱され、周恩来、鄧小平とも語り合った日中平和友好条約の締結を見るに至ります。

1972年には、今、世界30ヶ国近い言語に翻訳されて各国で真剣に読まれているトインビーとの対談が始まりました。まさに私たちの大学時代は、創立者が世界史を大きく動かしている、その世界の歴史の回転機の渦中に自分もいるんだとの充実した実感を持てた大学時代でした。

本年の、わが創大出身者でもある程永華大使の講演でも触れられておりますが、1972年当時の往来人数は1万人、現在は500万人を超え、また貿易額は1100億円から31兆円にまで拡大。

それぞれ500倍、300倍とその発展のスピードはすさまじい勢いです。

今年は日中提言から44年となりますが、この提言によって、日中友好の歴史は点から線へ、そして広範な面への広がりを持ってきました。いわば、この拡大の底流には創立者の「日中提言」が大きく流れております。そのことは今後の歴史の中でますます輝きを放って証明されていくでしょう。

さて現在の時代状況は、中国の大発展により大きく変化してきております。今までの交流は、日本が先進であり、技術も経済も中国より圧倒的に進んでいたという背景があります。しかし現在に至って、この状況の逆転傾向が加速しております。このまま中国の発展が順調に進めば、かつての漢や唐の時代のように、日本が貢物を持って強大国の中国にその存在を認めてもらうというような歴史回帰の状況にもなりかねないという現在の分析もあります。日本は人口も減り、ほとんどの企業は中国に工場を持ち、その消費も中国でおこなわれ、日本が誇った優秀な技術も中国に移転し、極端に言うとは日本は「東に浮かぶ小島の風光明媚な観光漁村」というような位置づけも、すでにまことしやかに論議される昨今であります。

では、こうした時代への突入期に今があるとする、日本は一体何を持って「日中友好の機軸」としていくべきか。従来は「日中提言」が大きなバックボーンとなって日中友好の促進がなされたといっても過言ではありません。今後、この提言の先見性がますます光り輝いていくことは間違いありません。その上で、本日申し上げたい点は、先程触れた日本の状況変化、及び今後の中国が抱える課題、例えば貧富の格差、環境問題、農村問題、金銭主義の克服、精神文明の発展、民主化、地方分権化等々、山積みの課題というより、今後重層的に継続して内的にまたグローバルに解決していかなければならない問題が多くあります。

こうした問題の解決の根底に何が必要か。日本と中国が抱える問題の解決の根底に据えるべき思想は何か。今後の日中友好の機軸になる思想は何か。私は声を大にして「池田思想」しかない、と申し上げたい。

日中提言から4年後に始まったトインビー対談に発したあらゆる分野の世界の一級の知識人、社会活動家等との対談。これは、キリスト教世界、イスラム教世界、中華世界とも、宇宙や生命論、芸術論、家庭や人生論、——ありとあらゆる人間としての、社会としての、行動規範が示されています。おそらくここまで広範に深く人間社会を捉えた思想の展開というのは、かつての世界の歴史にはありません。日本、中国のみならず、世界中のあらゆる民衆が渴望している思想が池田思想であると思います。

かつて日本が侵略したあの中国から、100を優に超える名誉学術称号があり、更に30近い中国の大学で「池田思想研究会」なるものが出来ております。侵略者日本の著名人の研究をするなどとてもないという声も大学内に多くあると聞いております。そんな環境の中で、中国の有数の大学で、中国の学者、学生が自主的に「池田思想」に積極的に取り組みはじめました。

私は、今後の日中友好の機軸はこの「池田思想」にあると思っています。日中提言によって大きな面にまで拡大した日中友好の流れは、今後この「池田思想」によって、面から立体へとくみ

上げられていくと思います。いや、そうしなければなりません。昇華させていかねばならないと思います。その主体者がまさに今集われた創大生の皆様であると思います。どうか皆様は徹底して「池田思想」を自らの細胞に刻みつける思いで、学びに学び、立体的な日中友好の前途を目指していただきたいと思います。皆様の取り組み次第です。頑張ってくださいたいとエールを送ります。私自身もこれからの人生は、この点に焦点を絞って行動していきたいと決意しております。

中国研究会を設立したとき、私の希望は3つありました。「中研を100人のクラブにして大学内で基盤を作ること」、「創大を日中友好の牙城にすること」、そして、「創大を中国研究の日本一権威有る大学にすること」の3つでした。一番目の100人のクラブについては、私の卒業後、素晴らしい後輩たちの努力により数年で達成し、学内有数のクラブとして活躍の基盤が出来上がりました。2番目の「日中友好の牙城」については、創立者の大きな大きな戦いによって、名実ともに日本の大学の、またあらゆる機関のなかで、日本でも中国でも誰もが認める存在になってきております。多くの大学や団体の関係者がこぞって創大を訪れ、友好のシンボルである「周桜」の前で記念撮影をし、桜花爛漫の友好の花を見事に咲かせております。中国の新聞雑誌でも大きく取り上げられています。

3番目の「研究の権威有る大学」ということでありますが、中国の研究をするには創大に行くのが一番だといわれるような存在になるということですが、創大生の中から、中国関係で高橋強教授や樋口勝教授、川崎高志教授、また村上信明准教授が生まれてきておりますし、池田思想研究にも立派な成果を残されております。また東洋哲学研究所が校内に存在していることも心強く感じます。この3番目の研究の権威ということは100年200年という長年の学術上の蓄積が必要です。今後の創大と皆様の取り組みに大いに期待しております。

創大が、創価教育研究所を核に池田思想研究の中心となり、そしてその基盤の上に中国のあらゆる分野の研究を牽引する存在になることを強く期待し、話をしめくりたいと思います。長時間ご清聴大変にありがとうございました。